



写真-1 高砂港向島突堤・西防波堤（令和6年4月撮影）

■ 今も残る三代目・工樂松右衛門が造成した波止の一部

写真-1・2 は、高砂市高砂町相生町にある高砂港向島突堤の西防波堤を撮ったものです。この花崗岩の石積み施設は、三代目の工樂（くら）松右衛門が造成した湛保（船溜まり）を取り囲む波止の一部で、内側を一段低くし、船着場を兼ねた雁木（がんぎ）が設けられているのが見えます。

この型式は、初代松右衛門が亡くなる1年前に修築した鞆湊（現・広島県福山市）の大波止によく似ています。

昭和2（1927）年から昭和4（1929）年にかけて行われた高砂港修築工事の計画図によると、湛保を取り囲む波止の延長は、西側が約250間（≒454m）、南側が約200間（≒364m）ありました。そのうち、現在確認できるのは写真-1・2に写る40mほどの波止のみです。



写真-2 高砂港向島突堤・西防波堤

■ 高砂神社の初代工樂松右衛門翁の銅像

工樂松右衛門は、幕府の命や姫路藩・他の藩からの依頼を受けて築港、波止の築造、新田開発を行い、相応の格式や褒美を受けてきました。特に明治以降になって同13（1880）年7月、明治天皇の神戸行幸の際は三代松右衛門に対して太政大臣・三条実美から「初代松右衛門の帆布創製と諸港修築に従事し力を公益に尽くしたため、特旨をもって追賞金25円を下賜」のうえ表彰されています。

また同 16 (1883) 年 11 月には農商務卿正四位勲一等・西郷従道より「天明 5 (1785) 年、従前の製に代わる堅質の帆布を織り、それ以来環海の地で大きくその利益を受け、松右衛門帆布の名前が長く世の中に広がって世に益するところが大きい」との理由で追賞されています。

大正 4 (1915) 年 11 月、大正天皇の即位を記念して初代松右衛門に従五位 (しゅごい) が贈られましたが、それを祝して高砂神社に工楽松右衛門翁の銅像が建立されました。

銅像建立に際しては、地元をはじめ東播地区の郡や各町村議会議員・役場の関係者、高砂町各町の代表者、そして松右衛門が活躍していた兵庫津の北風家、喜多二平の親戚他、兵庫津の町の人々から多くの賛助金が集まりました。そのときの銅像除幕式の参列者名簿をみると、その範囲の広さがよくわかります。同じ今津町の住民であった美濃部達吉 (天皇機関説を主張した憲法学者、長男は元東京都知事的美濃部亮吉) や、達吉の兄・美濃部俊吉の名前もあります。

しかしこの銅像は、昭和 18 (1943) 年に戦時の金属類回収令により供出したことから、四半世紀の間、銅像の台座だけになっていました。

昭和 41 (1966) 年、兵庫県天幕商工会会長らの呼びかけによって全国の帆布、重布業界の人々の寄付により銅像が復元されました。供出前のオリジナルの銅像の石膏型が工楽家に保存されていたため、それに基づき完全復元できたそうです。

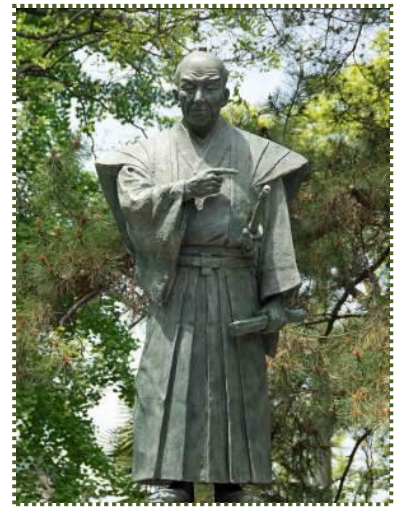


写真-3 高砂神社の工楽松右衛門翁像

■ 工楽松右衛門旧宅は、四代松右衛門が取得したもの

工楽松右衛門旧宅は、工楽家より平成 28 (2016) 年に土地とともに高砂市に寄贈されました。その際、建物内に保存されていた 1 万 5 千点に上る文書を高砂市に寄託していましたが、そのうちの約 3,800 点の古文書の調査を高砂市教育委員会が日本福祉大学の先生等に依頼しました。その調査結果をまとめた「工楽家文書調査報告書」(2019 年 6 月 5 日、高砂市教育委員会発行) によると、工楽松右衛門旧宅は工楽松右衛門が建てた家ではなく、明治期に四代目工楽松右衛門が他の人から取得していたことが明らかになっています。初代から三代松右衛門までは、もっぱら東宮町が生活の中心であったと思われます。

現在公開されている工楽松右衛門旧宅は、四代目以降が暮らした家として平成 30 (2018) 年 6 月より一般公開されています。



写真-4 工楽松右衛門旧宅



写真-5 工楽松右衛門旧宅を裏庭から撮影

■ 初代松右衛門の事業を引き継いだ二代松右衛門と三代松右衛門

初代松右衛門の養子であった御影屋長兵衛は、初代が文化 9 (1812) 年に亡くなると家督を継ぎ、二代松右衛門を名乗ります。初代同様姫路藩に御水主並、金 5 両と二人扶持で召し抱えられました。

二代目の仕事として重要なのは、文化文政期（1804～1830年）に波止道の西側の中州において新田開発を行ったことです。高砂の新田開発は風波が強いことから難しく、町の有力者も協力することを拒んだことから、二代目も自分一人では力不足と断ります。しかし、藩から押し切られるかたちで文政2（1819）年8月頃新田開発に着手します。

南側の沖手に堤を築き、東の波止道に沿って「川堤」と呼ばれる堤を築くことで、海や川と遮断することに成功します。堤内の州を埋め立てて、その周囲に溝を張り巡らせて堤内から潮水を排出し、土地を整理・区画していきました。

文政8（1825）年に新規開拓地の検地があり、このときはじめて自らの姓を冠した「宮本新田」と認められました。

二代目は高砂での仕事を次の世代に託し、嘉永3（1850）年4月9日、67歳でこの世を去りました。

二代松右衛門の子は宮本屋長三郎といい、二代目が亡くなると7月に三代松右衛門を名乗ります。姫路藩からは二人扶持を与えられ、川掛奉行支配として名字帯刀を許されました。

三代松右衛門の仕事で重要なのは、元治元（1864）年から慶応3（1867）年に波止道の西側に波止で囲まれた湛保（湛浦）を造成したことです。湛保造成によって川による土砂流出に影響されにくい深い港ができたことで、北前船が干鰯（ほしか）を積んでやってくるなど高砂にとって新しい展望が開けました。

一文字波止の北側に、三代松右衛門らの名が刻まれた「湛保新築碑」（向島石祠）があり、傍らにある説明板には以下のような説明が記されています。

高砂向島砲台場跡「湛保の祠」

文久3（1863）年、加古川河口に広がる中州の向島南端に築かれた台場で、当時は大砲が3門据え付けられたとされる。高砂向島台場築造以前は、下流側に川口御番所、より上流側には常番所（高砂常番所）の2箇所を番所を設けて高砂江の警備にあっていた。また文久4（1864）年には、台場の西隣に湛保（人造の港）が築造され、祠には港の施設などを築いた三代目工楽松右衛門らの名前が刻まれている。この祠は、西側対岸の南材木町にあったが、昭和4（1929）年に移築された。現在も堤防の基段部分に当時の湛保の石垣が残っている。

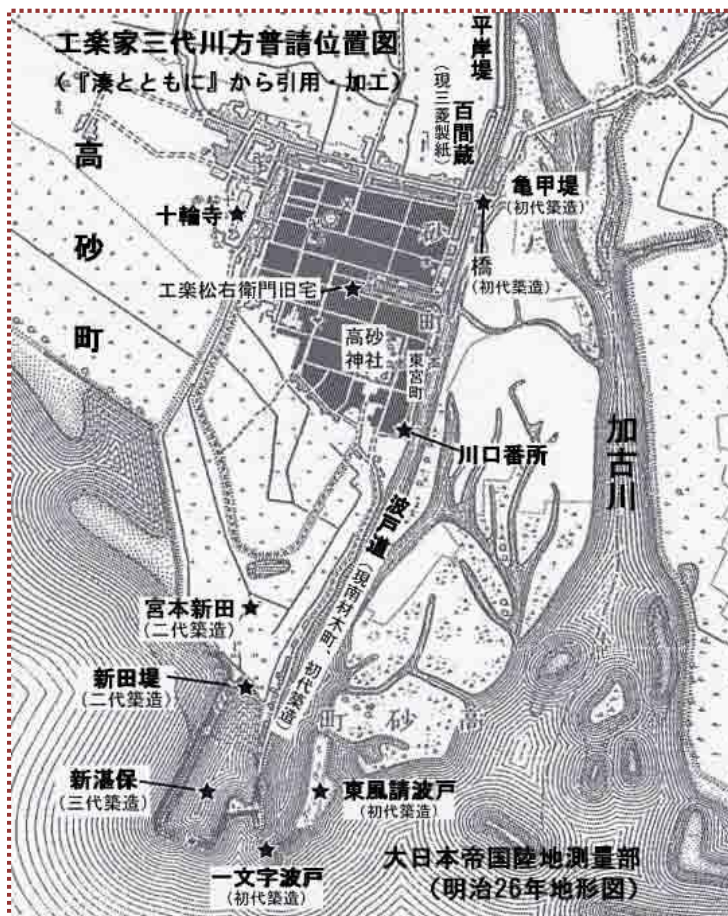


図-1 工楽家三代川方普請位置図



図-2 高砂港改修前の状況

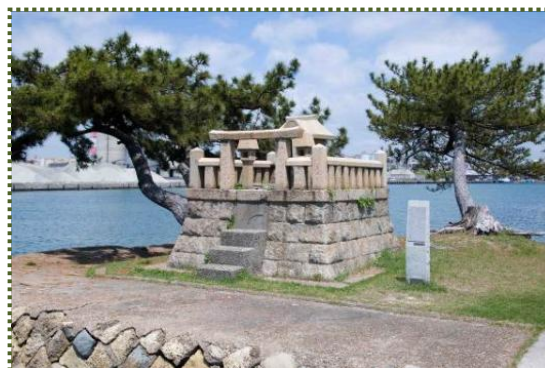


写真-6 「湛保新築碑」（向島石祠）

■ モノローグ

元々工樂松右衛門についての筆者の認識は、「名前だけは何かで聞いたことがあるような……」といった程度でした。それが、平成 29 (2017) 年 10 月に発刊した『ひょうご水百景』東播磨 No.77 において高砂堀川を取材する中で、少し詳しく知ることになった。ただ、その時は「加古川舟運と海運の中継基地・堀川」がテーマだったので、工樂松右衛門が主人公ではありませんでした。

今回、向島突堤が選奨土木遺産に認定されたことを契機に執筆した『ひょうご水百景』は、向島突堤を築いた工樂松右衛門が主人公ということで、松右衛門の足跡を高砂はもちろんのこと広島県の鞆の浦まで足を延ばして取材しました。

松右衛門の功績は、「松右衛門帆」の織りあげに成功し、それを普及させたことはもちろんですが、ロシア帝国の南下政策から領土保全をはかる目的で幕府より択捉島での埠頭建設の命を受け、厳寒の地での危険な作業を経て寛政 3 (1791) 年 10 月に埠頭建設を成し遂げたことにあります。

とはいうものの、晩年、故郷に帰ってからも地域の発展に多大なる貢献をしています。松右衛門が築いた向島突堤もその一つです。功成り名遂げて以降も、人のため、地域のために働く…大したもんです。

シベナガムラサキ

ムラサキ科シャゼンムラサキ属に分類される二年草。ヨーロッパの北部を原産とする。北アメリカやオーストラリア、日本（北海道、大阪府、兵庫県、三重県）に外来種として定着している。全草に白くて硬い毛が密生する。草丈は 40 ～80cm、葉はへら形で、根生のものは長さ 10 cm になり、上方のものほど小さい。花期は夏（日本では 5～6 月）。上部の葉腋に、青紫色の円錐花序をつける。花序ははじめ先が巻いているが、開花とともに先がほどける。花は弓状に曲がった筒型で、蕾のときは淡紅色で、後に紫色から青色に変わっていく。工樂松右衛門旧宅の裏庭に咲いていた。



写真-7 工樂松右衛門旧宅の裏庭に咲くシベナガムラサキ



写真-8 シベナガムラサキ

【参考資料】

- 1 『日本遺産と播磨：工樂松右衛門の挑戦～高砂の船と湊』 中川すがね・播磨学研究所編 令和 2 年 9 月
- 2 『「高砂港向島突堤」の選奨土木遺産認定について』 兵庫県 HP 令和 5 年 9 月
https://web.pref.hyogo.lg.jp/ehk10/r05_dobokuisan_mukoujimatottei.html
- 3 『工樂松右衛門とは その功績』 兵庫県高砂 工樂松右衛門 公式サイト
<https://matsuemon.net/deed.html>
- 4 『松右衛門の顕彰』 兵庫県高砂工樂松右衛門公式サイト
<https://matsuemon.net/honor.html>
- 5 『湊とともに－工樂松右衛門と江戸時代の高砂－』 高砂市教育委員会編 令和 2 年 3 月
- 6 『工樂松右衛門、美濃部達吉、シベナガムラサキ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発刊：令和 6 (2024) 年 11 月 『ひょうご水百景』No.209

改訂：令和 8 (2026) 年 9 月 『ひょうご水百景』No.209-1